

未来が見えない

格差社会を問う

22

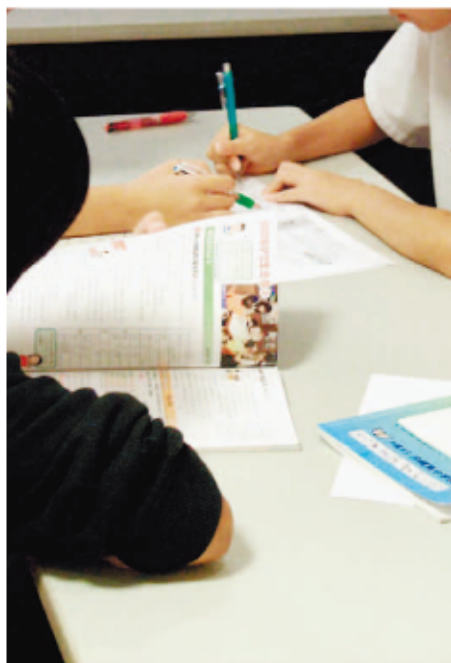
教育支援弱者に光

「本当に助けの神です」。経済的事情で学習塾に通えない子どもを支援する沖縄市のNPO法人エンカレッジ(坂崎紀理事長)の事業で、今年八月から中三の娘を塾に通わせている母親(52)は安心した笑顔を見せた。母子世帯で、何とかやりくりするつもりでいたが、今年七月に失業してしまった。「親として子どものために選択肢をつくってあげたい。学歴社会の中で、高校を卒業することでいろんな面が変わってくる。どうしたらいいか悩んでいた」娘(15)は「ほかの人よりテストの点数が低くて、でも行きたい高校があるから、塾に通いたかった。授業は楽しい。学校の勉強も分かるよう

連鎖を断つ

になり、もっと頑張ろうと思った」。別の中三女生徒(14)も「テストの点が上がった。志望高校のランクも上げた」と話してくれた。

県内では家庭の経済状況から、学用品代などの就学援助を受けている小中学生の割合が二〇〇七年度で14・3%。



と沖縄中三の娘(15)は「ほかの人よりテストの点数が低くて、でも行きたい高校があるから、塾に通いたかった。授業は楽しい。学校の勉強も分かるよう

中でも沖縄市は22・1%に達する。

エンカレッジでは市内で就学援助を受ける小五から中三までの児童・生徒を対象に、企業、個人から募った基金を活用して、個人負担なく賛同する塾(現在九カ所)へ通えるよう支援している。現在、

中一から中三の二十一人を受け入れている。沖縄市のみの活動だが、事務所には豊見城、浦添など南部地域からも問い合わせが来る。学習支援のボランティアも、基金も足りない状況だ。

坂理事長は、当初勉強の習慣も意欲もなかった子どもたちだが、休み時間にも鉛筆を置かないほどに変わった姿を目の当たりにした。「困窮家庭で学習機会が与えられなくて夢が持てず、職業選択の幅が狭まれば、負の連鎖が続いてしまう。均等に教育機会を与えることで、十年、二十年後の人材育成になる」と強調した。

北谷町教育委員会が設置す

草の根事業 福祉にも効果

る町青少年支援センターでは、中学卒業後、進路が未定で高校受験を目指す過卒生や高校中退者に学習支援を実施している。元教員や教員免許を持つセンター職員が週三日の授業を行うほか、将来の生活相談や進路相談にもなる。これまで高校、大学への進学者も出した。スムーズに学校生活が送れるよう、必要に応じて、入学後も継続支援している。「子どもが変わることで親もほっとする」と河上親彦所長。子どもの変化が親の元気にもつながっている。

坂理事長は市内の福祉と教育関係のNPOと協議の場を持ち、連携を深めている。「教育と福祉はつながっていると思う。エンカレッジの活動は、教育支援、子育て支援、居場所づくりと、いろいろな意味がある」

(岡部ルナ)